



1987

物語について
定価 4200円

編 者 W. J. T. ミッチェル
訳 者 海老根宏・原田大介・新妻昭彦
野崎次郎・林 完枝・虎岩直子
発行者 下中直也
発行所 株式会社 平凡社
東京都千代田区三番町 5 番地
郵便番号 102 振替 東京 8-29639
電話 (03)-265-0471〔編集〕
(03)-265-0455〔営業〕
印 刷 東洋印刷株式会社
製 本 和田製本工業(株)
発行日 1987年 8 月19日 初版第 1 刷

ISBN4-582-74406-0

乱丁・落丁本のお取替えは直接読者サービス係
までお送り下さい(送料は小社で負担いたします)

物語について

On Narrative

Edited by W.J.T. Mitchell
ミットチル
海老根宏………訳

平凡社

088101

ON NARRATIVE

Edited by W. J. T. Mitchell

Copyright © 1980, 1981 by The University of Chicago

Japanese translation rights arranged with
The University of Chicago Press, Illinois
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

Japanese edition © 1987 by Heibonsha Ltd., Publishers

Printed in Japan

目次●物語について

凡例 ————— 6

まえがき ————— 9

歴史における物語性の価値

精神分析の対話における語り

ジャンルの掟

秘密と物語のシークエンス

ねじ曲げられた話

あるいは、物語、研究、シンフォニー

小説にできること、映画にできないこと

(そしてその逆)

社会劇とその物語内容

物語の時間

くらーい嵐の晩でした

あるいは、なぜ私たちは焚火のまわりに集まるのか

ヘイドン・ホワイト ————— 15

ロイ・シェイファー ————— 51

ジャック・デリダ ————— 89

フランク・カーモウド ————— 137

ネルソン・グッドマン ————— 167

シーモア・チャットマン ————— 191

ヴィクター・ターナー ————— 219

ポール・リクール ————— 259

アーシュラ・K・ル・グイン ————— 293

補足的感想

- I 物語のいかに、何を、なぜ
 - II 言語、物語、反・物語
 - III 物語の異型、物語の理論
- ## 批判と応答

- I 万人のための年表
- II 「変哲のない七一年」
ヘイドン・ホワイต์に答える
- III 現実の出来事の物語化
- IV 語りと語られるもの
- V バーバラ・ハーンスタイン・スミスに答える

原注 ————— 409

訳者あとがき ————— 424

装幀 ————— 戸田ツトム

ポール・ハーナディ ————— 313

ロバート・スコルズ ————— 317

バーバラ・ハーンスタイン・スミス ————— 329

ルイス・O・ミンク ————— 365

マリリン・ロビンソン・ウォルドマン ————— 375

ヘイドン・ホワイット ————— 386

ネルソン・グッドマン ————— 393

シーモア・チャットマン ————— 396

凡 例

- 一、本書は W. J. T. Mitchell (ed.), *On Narrative*, The University of Chicago, 1981 の全訳である。
- 一、原著の「」は「」で、*マ*は『』でそれぞれ示し、() と「」はそのまま訳文に使用。
- 一、原著のイタリック体による書名・作品名は『』で《》で示した。
- 一、原著のイタリック体による強調は、傍点を付した。
- 一、原著の脚注は、本文中に☆1、☆2……を付し、巻末に収めた。
- 一、「」内は訳者による補注。
- 一、原則として、*narrative* には「物語」、*story* には「話」、*tale* には「お話」、*discourse* には「叙述」の訳語をあて、例外にはルビを付した。「訳者あとがき」を参照。

物語について

まえがき

この論文集は『クリティカル・インクワイアリ』誌の特別号（七巻一号、一九八〇年秋季）を拡大したものであるが、そもそものは一九七九年十月二十六日から二十八日まで、シカゴ大学で開催されたシンポジウム「物語——シークエンスの幻想」が基になっている。新たにルイス・O・ミンクとマリリン・ロビンソン・ウォルドマンの批判的論評と、ヘイドン・ホワイ特、ネルソン・グッドマンおよびシーモア・チャットマンからの答えを加えたこの論集は、物語というテーマについての最近のもっとも重要な思考のいくつかを、学際的に集大成したものとなった。文芸批評家、哲学者、人類学者、心理学者、神学者、美術史家、小説家などの間の論議と協力を本書は反映しているが、その目的とするところは、物語の問題を「美的なもの」——つまり詩や劇や小説における物語——の領域をはるかに超えて考え、そして社会的また心理的な形成物、とくに価値と認識の構造の中で物語が演じている役割を探ることにあった。

これは普通のものとは一味違ったシンポジウムだったが、その原因は多分、これを組織し運営したジョン・カウアンとジョイス・フュークト・ハヴィアが、それに社交の場としての性格を与えようと努めたおかげである。同じような多くの集会とは違って、このシンポジウムは同時にたくさんのグループに分断されることはなかった。専門性の壁を作ることは許されず、講師、討論者、招待者の全員が週末の間滞在して正式の討論会に加わり、さらにシカゴの暗い嵐の夜晩くまで居残って、さまざまな問題を論じたのであった。ポール・ド・マン、ロバー

ト・スコールズ、リチャード・シフ、バーバラ・ハーンスタイン・スミス、デーヴィッド・トレイシーらを含む何人かの著名な参加者たちは、自分では論文を発表しなかったが、討論の過程で重要な貢献をした。これらの意見は、シンポジウムの後で講師たちが自らの論文に加えた修正や、本書の最後の部分に活気を添えている批判的論評の中に反映されている。

物語という問題の序文を書くとなると、このシンポジウムの物語を語ろうという誘惑はもちろん避けがたいものである。しかしどの話をしたらよいのだろうか？ シンポジウムの組織者たちはさまざまな学問分野から優れた講師を呼び集め、「シークエンスの幻想」という題目の下に物語の問題を論じさせようとした——これが彼らの筋書きであり陰謀だったのである。ともあれ、この計画は最初から狂ってしまった。講師に次ぐ講師が、シークエンスが幻想である、あるいは物語の規定因であるという前提に異議を唱えたからである。それともこのシンポジウムについての本当の物語は思想史の次元にあって、いかにしてこの時代、この場所に哲学者、文芸批評家、心理学者、美術史家、人類学者、小説家、それに（一番の変わり種）物語学者までが集まって、われわれが物語を語り、理解し、使用するさまざまな仕方を論ずることが可能になったかを説明するものだろうか？ それとも本当の物語はジャーナリズム風に、誰が、いつ、どこで、何を、いかにということに関して「話を正確に伝える」ことにあるのだろうか？ それに『シカゴ文学評論』に載ったような文芸ジャーナリズム記事もある。そこではこのシンポジウムは三幕の儀式劇として描かれていて、主な講師たち（それが誰かは読者におまかせする）は悪漢、スケープゴート、解釈学的ピエロ、巫女／ソフィスト／僧官、内なる自我、聖人、異化効果信者、懷疑主義者、教授、批評家、それにコーラスなどの役で登場する。

単なるシークエンス、連関性、中心主題が物語の本質ではなく、葛藤こそがそれであるとするならば、このシンポジウムは確かに物語に溢れた集まりであった。『クリティカル・インクワイアリ』の本号をあらゆる分野の物語研究者にとって有益なものとするゆえんの一つは、人間が世界を表象し構造化する手段としての物語の本質

ならびに価値について、もっとも根本的な議論が劇的に、（そして望むらくは明晰に）ここに展開されているからである。言うまでもなく、現代相対主義の決まり文句の一つは、出来事やそれについての物語は多様な異型をとるのであり、「真の」「権威ある」または「基底的」な原型を持つていという主張はうさぐさい、というものだ。しかし真の問題は物語の真偽を弁別することではなく（これは理論的問題というよりむしろ実際の問題であると思われる）、現実（現実の事件にかかわる事実的現実であろうと、虚構物語にかかわる道德的象徴的現実であろうと）を意味づける様式としての物語性の価値それ自体なのである。これに関して、ヘイドン・ホワイットの講演が、明確な「反」物語主義の立場にもっとも近づいている。彼は、物語性それ自体に正統的かつ政治的に保守的な社会条件を支える傾向があり、現代の歴史学と文学における物語性への反逆は、社会制度の権威に対する反逆なのだとし唆している。

ロバート・スコルズが述べたように、いまや物語について、マルクスが宗教について言ったと同じことを言うことができる——それは一つの「阿片」であり、偽りの一貫性の感覚、「シックエンスの幻想」を与えることによって、われわれの理性を曇らせるということである。続くエッセイの多くは、振り返ってみると、この論難に答えるためのものであるかのように見える。フランク・カーモウドは、われわれが物語の秩序正しい慰めに溺れるのを防ぐ療法を提出している。彼によると、物語はまた「秘密」を隠しているのであり、その秘密を「過大に読む読者……秘密を詮索する暇のある特殊なアカデミックな階層」ならあらわにすることができると、という。彼はこうして、物語性には悪趣味、支離滅裂、混沌といった次元があることを保証してわれわれを安心させたが、彼の発見はこの論集のあちこちで繰り返されるテーマなのである。例えばヴィクター・ターナーは、物語は儀礼と同じく、単に無秩序と混沌の力に対抗するのではなく、一文化や一個人に予測できない変容をもたらすために、解体や不確定性を現出させる手段でもあると主張する。またポール・リクールは、物語とは「開いた」解釈構造であり「世界を記述し直す際のモデル」であると感じている。さらにジャック・デリダは「ジャンルの掟〔法〕」

（物語というジャンルを含む）は「まさにこの法を構成する反一法によってあらかじめ内奥から脅かされている」、その結果、「法は狂っている。法は狂い、法は狂気である。……狂気を考えることができるのは、法との関係からにおいてのみである」と述べるのである。

狂気と物語の法との間の出会いについて、職業柄もつとも内側からの経験を積んだ講師は、言うまでもなく優れた精神分析医であるロイ・シェイファーであるが、彼の関心は精神分析を（実証科学と対立する意味で）一つの解釈の学として述べ直すことにある。彼のいう解釈は個人の発達に関する典型的ないし規範的な物語に基づき、変化と、社会における有益な活動を許すような形で、人々が自らの生活史を理解し記述し直すことを助けるものである。シェイファーのような物語の使用法が物語の法と狂気を調和させるものか、それとも狂気の革命的エネルギーに良性のものにしても偽りの解決を押しつけるものかは、この論集の読者が結末をつけるのが一番よい、もう一つの別の物語である。

現実に秩序を与える手段にせよ、健全な無秩序を解き放つ手段にせよ、物語の価値をめぐる議論と並んで、物語の本質についての議論があった。その焦点として三つの問題が浮上したが、それらをもつとも一般的な形で扱ったのはネルソン・グッドマンである——（一）物語性の最低の条件は何か。（二）物語が変質せずに許容できる歪曲の限度はどのくらいか。（三）一つの物語のさまざまな異型の間の関係はどういうものか。これらの問題は時として基底の物語の存在という観念に集中する。それはある話のすべての異型に通底するいくつかの最低限の特徴を備えた「原物語」であり、それによってわれわれはそれらの異型を何物かの異型として認識できるのである。この論集中でこの想定を定式化したシーモア・チャットマンは、「深層構造」という言語学の用語を用いたが、これが「物語学」（ナラトロジー）という学問の基本的出発点をなすのである。バーバラ・ハーン・スタイン・ミスはこれに精力的な批判を加え、物語に関するこの二元論的観念は、「素朴なプラトン主義の影響がいまだに尾を引いているのは明らかであり……論理的に疑わしいし、方法論的にも問題の所在をばやけさせる」と主張し

ている。ポール・リクールもこの見解に反対して、「物語性と時間性の間の相互的關係」を強調する多次元的実存的な時間像を提起している。物語にさまざまな異型があるばかりでなく、われわれの生きるすがである物語が作る時間そのものにも、さまざまな異型があるのである。

もちろん、物語の価値ないし本質についての争いだけが、物語についてのこのシンポジウムの唯一の物語というわけではなかったし、もっとも興味深い物語でもなかった。おそらくこの集いを経験した者の心に残るもっとも重要な感覚は知的な興奮と発見の魅力であり、他の重要な人間の創造物の研究に伍して、物語の研究もまた現代にいたって飛躍的に発展したという共通の感情であつたろう。物語研究はいまや文学専門家やフォークロア研究家が、心理学や言語学から術語を借りて考えるだけの分野ではない。それは人間科学、自然科学のすべての領域において独自の洞察をもたらす源泉となっている。本書に寄稿した人々の何人もが注意しているように、物語の観念は、古代の *gnarus* & *gnosis* という意味を取り戻しつつあるように見える。それは行動から生まれる知の様式であり、ただ単に子供に聞かせるお話や暇つぶしの噂話だけではなく、われわれが自らの生を生きる順序そのものに根ざす知なのである。シンポジウムの最終日に、アーシュラ・K・ル・グインは機知に富みジャンルのに不確定な講演「くらしい嵐の晩でした——あるいは、なぜわれわれは焚火のまわりに集まるのか」で、この知の様式の魔法を呼び起こしてみせた。これを散文と呼ぼうと詩と呼ぼうと、あるいは物語、メタ物語、パロディ、物語讃歌のいずれと呼ぼうと、物語シンポジウムの物語がどこかに見つかるとするなら、それはル・グインの陽気でも忘れない物語の秘められたシックエンスの中に見つかるはずである。

物語についてのこのシンポジウムはシカゴ大学校外教育部の後援で開かれ、部長C・ランレット・リンカンはまだ議長をも務めた。組織運営は校外教育部副部長ジョン・カウアン、部長助手ジョイス・フュークト・ハヴィアが担当した。資金は校外教育部、およびアンドルー・W・メロン財団の援助を受けた中西部大学セミナーから拠出された。講師、討論者、特別招待者を列記する——シーモア・チャットマン、ポール・ド・マン、ジャック

ク・デリダ、ハワード・ガードナー、マートン・ギル、ネルソン・グッドマン、ポール・ハーナディ、フランク・カーモウド、アーシュラ・K・ル・グイン、フランソワーズ・メルツァー、W・J・T・ミッチェル、バーバラ・マヤホフ、ポール・リクール、ロイ・シェイファー、ロバート・スコールズ、リチャード・シフ、バーバラ・ハーンスタイン・スミス、リチャード・スターン、デーヴィッド・トレイシー、ヴィクター・ターナー、タマシ・ウングヴァリ、ヘイドン・ホワイト。

W・J・T・ミッチェル

歴史における物語性の価値

The Value of Narrativity in the Representation of Reality

ヘイデン・ホワイト

Hayden White